

機関番号：15201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730430

研究課題名（和文）少子化社会のなかでの日本と中国の青年・若年父母の結婚観・子育て観に関する調査研究

研究課題名（英文） A study on the views of Japanese and Chinese young adults and young married couples for marriage and parenting in the birthrate-declined society

研究代表者

石野 陽子（ISHINO YOKO）

島根大学・教育学部・講師

研究者番号：90457028

研究成果の概要（和文）：少産を施策で誘導し少子化社会となった中国と、様々な子育て支援施策にもかかわらず少子化が深刻な日本において、両国の青年達・若い既婚者達は、結婚や子育て、家族、そしてそれを取り巻く制度などをどのように考え、家族をめぐる諸問題へどのように取り組んでいるのであろうか。これらの事柄を、両国でのインタビュー及び質問紙調査によって探った。その結果、中国の青年は、日本の青年よりも家族を大切にし、自分の生活の豊かさや家族の繁栄のために自分はどうか将来を歩むべきかを中心に考えていた。したがって、進学や就職、結婚の如何は、自分自身や家族の将来を左右するのであり、慎重かつ積極的に考えていることが示された。

研究成果の概要（英文）：The present study investigated how do the young adults and young married couples in both China, where measures have been put in place to induce declining birthrates, and in Japan, where the birthrate continues to further decline despite the various parenting support programs implemented, feel about marriage, parenting and family and the surrounding systems put in place and how are they dealing with the various issues concerning families. The results show that Chinese young adults placed a greater importance on family than their Japanese counterparts and their thoughts were centered on what road they should take in the future for a fulfilling life and for the prosperity of their family. It was suggested that their decisions on further schooling, employment or marriage are actively and carefully considered as they affect their future as well as their family's future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：教育心理学

科研費の分科・細目：

キーワード：少子化、子育て、父母、青年、結婚、国際比較、国際研究者交流、中国

○中国の青年は、日本の青年よりも一般に、それまで所属していた家族を大切に、自分の生活の豊かさを求めるのと同時に家族の繁栄のために自分はどうか将来を歩むべきかを中心に将来を考えていた。したがって、進学や就職、結婚の如何は、自分自身や家族の将来を左右するライフイベントであるという意識が高く、慎重かつ積極的に考えていることが示された。子育てについては、中国では元々ほぼ全家庭が共働き家庭であるため、祖父母の積極的な物理的支援（特に、送り迎えや父母がいない間一緒に過ごすこと）を望んでいる。しかし、子育て方法は自分たち父母世代に一任して欲しい、という姿もみられた。この考えが祖父母世代へ肯定的に受け入れられるかについての議論は今後の課題である。しかし、日本においては核家族化が浸透しており、なおかつ日常的な物理的支援が受けられないほど遠方に居住する傾向にある。したがって、子育て方法を教えてもらえる機会が少なく、また、物理的な支援も受けられない。しかし、だからといって子育ての外注を多用することは、場合によっては経済的負担が大きいため、利用が難しいというのが現状である。日常的で恒常的であり、なおかつ経済的負担の小さな子育て支援を子育て世代へどのように提供するのか、そのシステムを整えることが急務といえる。

1. 研究開始当初の背景

(1) 日中両国の社会的状況

日本の合計特殊出生率は、第2次ベビーブーム終了の1975年以降は低下の一途をたどっている。1950年には3.65であったその数値が2005年に1.25になっており、大きな社会問題として認識されている(厚生労働省, 2006)。子ども(あるいは理想の子ども数)をもととしない理由について20-40歳代の女性に尋ねた最近の調査結果によれば(国立社会保障・人口問題研究所, 2001)、約4割が「育児にお金がかかるから」と答えており、その他に「育児への身体的・心理的負担」「仕事やレジャーへの差し支え」を挙げている(石野, 1997, 1999)。経済的負担に加えて、価値観やライフスタイルの多様化が大きな要因の1つとなっている(石野, 2004, 2007)。

これに対して中国では、1979年から施行された計画生育、いわゆる一人っ子政策により、子ども世代の人口比の急激な低下と男女比の崩れ(労働力や家督制度重視のため女兒の方が少ない)が進んでいる。また元来、家督相続者を大切にす国民性から、両親2人と

その親4人の計6人がひとりの子を育てるという構造ができあがり、過保護に育てられた子どもを小皇帝と呼ぶほどである。家族の行く末を託す者はその1人であるため、教育に対する熱心さは加熱している。例えば2005年の中国吉林省における幼稚園児をもつ母親の進学へ意識調査では、9割以上の母親が大学卒業を望み、全体の約4割が博士課程修了までと答えているほどである(李, 2006)。

(2) 先行研究の概要

このような少子化傾向が子育てにどのような影響を与えるのかを精査するため、これまで様々な日中比較研究が行なわれている。たとえば、依田(1997)は、中国の子どもたちは依存性が高く協調性が乏しいなど人格形成上の問題があることと、養育者の子育てストレスの高さを指摘している。しかし一方で、母親である30歳代以上の日本・中国両国の女性に行なった子育て意識に関する研究(岡本, 2002)によれば、中国女性は日本女性に比べて子どもをもつことに肯定的で、かつ子育てに対してネガティブなイメージが低くポジティブなイメージが高い。また、同様の子育て意識についての調査では(姜・佐々木・八重樫・徐・石川, 2002)、日本女性の方が中国女性より子育てに自信がなく、子育てを生きがいと見なさない傾向があるが、3歳児神話には同感するという矛盾が生じている。これは、ほとんどの中国女性が元々就業と子育てを両立させたライフスタイルをもち、その多重役割がアイデンティティを支え、心理的健康をもたらしているからであると考察されている(岡本, 2002)。

極端な世代比と男女比の崩れという事態を重く見た中国政府は、2002年に一人っ子政策の緩和をすすめた(地域によって人口問題の程度が異なるため、緩和の程度や方法は省、自治区、特別市に任された)。特に大都市圏では、一人っ子同士の夫婦は子どもを2人まで産めるようになった。しかし、大都市では先進諸国と同じように出生率が自然に減少している。たとえば、全中国の特殊合計出生率は1.8であるのに対して上海は0.8であり、政策転換の思惑とは異なり出生率は上昇していない(中国人口統計年鑑, 2006)。

(3) 本研究の問題意識

一人っ子政策施行後28年が経ち、今や、一人っ子世代が結婚・子うみ・子育てを考える時期である。その世代の子育て意識に焦点をあてたルポルタージュ的な書籍『独生父母』(一人っ子の父母)が最近中国で刊行されたことから明らかなように、一人っ子世

代の結婚や子育てに関する心理的様相について社会的関心が高まっている。先述の先行研究(依田, 1997; 岡本, 2002; 姜ら, 2002)は、2002年以前に30歳以上の女性を調査対象者としているが、彼女たちは一人っ子政策開始以前に生まれた世代であり、一人っ子世代のもつ子育て意識の調査研究は現在のところ見あたらない。

本研究で調査協力者として想定している世代は、家庭環境や社会環境、また、国民意識において前世代と著しく異なっているはずである。そこでは、政策、上位世代からの期待や家制度に加えて、日本の事情のような経済的負担による子どもの育てにくさ、経済的格差、学歴格差、価値観やライフスタイルの多様化などが起こっていることはないだろうか。つまり、中国では国家施策の影響と個人意識変化の輻輳が起きている可能性がある。違いのみを見る日中比較ではなく、施策の方向性の異なりによる違いと、若年世代の意識の共通点とを調べていく調査を企画・実施し、考察を深める。

2. 研究の目的

(1) 未婚の青年層が結婚・子育てに、どのような意識・困難・要望をもっているのか。

(2) 既婚の若年男女が結婚・子育てに、どのような意識・困難・要望をもっているのか。

(3) 上記の意識等は、日中両国において、どのような類似や異なりを示すのだろうか。これらの調査課題を、面接調査や質問紙調査を繰り返すなかで精緻化し、将来のより大規模で経年的な調査における調査課題を設定していく。

3. 研究の方法

調査対象者：日本および中国の大学生、就学前児の母親。延べ1500人程度。

調査方法：集団面接調査、個別面接調査、自由記述、および質問紙調査を複数回行った。

調査時期：2008年5月から2010年11月。

4. 研究成果

(1) 日本青年の結婚観

1) 結婚そのものへの考えについては、①心理的作用がある(楽しそう、安定しそう、幸せ)(14.75%)、②家族をもつこと(14.03%)、③一緒にいたい人といることができる(9.71%)、④自分や家族に責任をもつこと(7.55%)、⑤大変そうである(5.04%)であった。

2) 結婚したいと思うかどうかとその理由については、74.17%の者が結婚したいと回答しており、したくないと答えた者は9.93%にとどまった。結婚したい(あるいは、したくない)理由については、①心理的作用があるから(落ち着きたいから、ひとりでは寂しい

から)(25.27%)、②子どもをもちたいから(8.60%)、③家庭を築きたいから(8.06%)、④したいことができないから(4.84%)、⑤義務・固定観念のためにすべきだと思うから(2.69%)であった。しかし、条件として、①経済的自立ができたのちであること(25.27%)、②よい相手にめぐまれること(13.44%)、③ふさわしい年齢・時期を見計らうこと(3.22%)を挙げていた。

(2) 日本青年の子育て観

1) 子どもや子育てそのものへの考えについては、①大変そう(31.99%)、②楽しみ・楽しそう(9.56%)、③幸せそう(6.99%)、また、③自身の成長につながりそう(6.99%)、⑤かわいだろう(6.25%)であった。

2) 自身が子どもをもつことへの関心については、71.62%の者が子どもをもちたいと答え、子どもをもちたくないと答えた者は16.89%であった。

子どもをもちたい理由については、①楽しそう(9.15%)、①家族が増えるから(9.15%)、③かわいいから(5.22%)、③子どもが好きだから(5.22%)、③子育てをすることで一緒に成長できる・学ぶことが多い気がする(5.22%)であった。子どもをもちたくない理由については、①今の自分では無理である(7.84%)、②大変そうである(5.88%)ということを挙げていた。

3) 子どもがいたとすれば、どのような子育てがしたいかということについては、①しつけを十分に行ないたい(13.21%)、②子どものしたいことをさせたい(12.26%)、③常識的に良いことと悪いことをしっかりと教えたい(10.38%)、④干渉しすぎず自由に育てたい(8.96%)、⑤個性に合わせてのびのびと育てたい(6.13%)であった。

4) 結婚への考えは何かを参考にしているかについて、①特に何も参考にしていない(32.67%)、②過去の両親の記憶(14.00%)、③現在の両親の記憶(8.67%)であった。

5) 子育てへの考えは何かを参考にしているかについては、①親(27.81%)、②特に何も参考にしていない(21.85%)、③家族(7.94%)ということであった。結婚への考えは総じて肯定的であり、経済的に自立ができるなど条件を整えば行ないたいと考えているものが多い。子育てに関しても、結婚よりはやや消極的であり大変そうだと思うものの多くの者が子育てを行ないたいと考えている。しかし、ここ30年の結婚率は低下傾向にある(総務省, 2005)ことを鑑みれば、これ以降に結婚観・子育て観が変化することも容易に考えられる。学生の頃の肯定感がそれ以降、どのようなことに影響を受けるのかをさらに精査する必要がある。

(3) 中国青年の結婚観

1) 結婚そのものへの考え：生活そのものが

安定する、経済的に安定する、好きな人と一緒にいる、家を受け継いでいく・残していく、ということを経婚からイメージすることであった。中国の青年の特徴としては、社会の発展のため、法律で社会・集団を形成すること、子どもを養育すること、など、社会の維持や発展に言及している者も多数みられた。愛情の墓（人生の墓場という意味に近いように考えられる）という記述も散見された。生活の安定などは日本でもよく見受けられる回答ではあるが、家を受け継いでいくもの、と強調して答える者は日本の調査（石野・清水，2009）ではみられなかった。一人っ子政策開始後の世代であるのに家を受け継いでいくことがかなわないかもしれないことへの抵抗はないのか、という質問については、実際のところ、一人っ子の家庭がほとんどということはないため、あまり心配はないのではないかと、ということであった。実際に本調査の参加者のうち、半数は兄弟がおり、彼らの友人などを考えてもおおむねそのような割合であろう、ということであった。

2) 結婚したいと思うかどうかとその理由：結婚したいと答えた者が 42.37%、今はできないがいつか時期が来ればしたいと答えた者が 9.32%、したくないと答えた者が 48.31%であった。結婚したい理由としては、家庭を築き次世代を育てたい、好きな人と一緒にいたい、心理的な作用を期待して、ということが挙げられた。結婚したくない理由としては、男女とも自己実現にむけて勉強に没頭しているため全く関心がない、精神的に未成熟だから、煩わしいから、経済的に不安定だから、ということであった。日本の青年より（石野・清水，2009）も結婚についての希望を語る上でも慎重で、状況を見据えた上での回答が散見された。

3) 結婚に至る条件：親や親族の承諾を必ず得ること、これが最も重要なことであると発言する者がいると、皆一様に頷いていた。中国では結婚は家を受け継いでいくものであるから、親のみならず親族から前もって承諾を得るのは当然のことで、承諾がなければ絶対に出来ない、ということである。相手の職業については特に願望はなかった。結婚後、もしも、相手が転勤などで家を離れることがあれば、どうするのか、という問いについては、自分が仕事を辞めて同行すると言うことは全く考えられない、ということであった。それは、経済的理由が最たる理由ではあったが、その他、辞めたあと自分が自分でなくなるように感じる、辞めたあとの経済的問題以外の自分の生活の保障がないから、などアイデンティティの喪失と関連するような発言が多いように感じられた。

(4) 中国青年の子育て観

1) 子どもや子育てそのものについての考え

と自身が子どもをもつことへの関心とその理由、については、①かわいい・好きなので関心がある、②責任が重い、③経済的負担が大きい、④社会の維持や発展には必要、という順で上がり、日本の意見でも多く見られたこともへの関心は共通してみられたが、子育ての責任の重さをあげ、それに自分がまだ見合っていないことに触れる物が多くいた。社会の維持についての意見は非常に特徴的であった。

2) 子どもがいたとすれば、どのような子育てをしたいかについては、①自分が自由に育てたい、②優良な子育てがしたい、③西洋式の子育てを行ないたい、ということであった。

3) 祖父母世代に子育てを手伝ってもらっていることに関する考えは、①父母世代は忙しいので手伝うことは当たり前、②自分たちとは子育てへの方針が異なるので、自分は手伝って欲しくないという意見で二分されていた。

(5) 日本の母親がもつ子どもへの罪障感

子育ての際に、子どもに対して負の情動や感情が喚起されることがある。本研究においては特に母親が子どもに対して抱く罪障感について検討した。

1) 罪障感を感じるがあると答えた母親は 87.20%、感じることはないと答えた母親は 1.32%であった。

2) 罪障感が喚起される場面として挙げられたのは、(1) 子どもについて否定的なことを言ったとき、感情的に怒ったとき、など、子どもの態度や行動をよく観察・理解せずに怒ったとき、(2) 自分のために時間を使うときや友人と時間を過ごすときなど、母親自身の都合によって、結果的に母親としての役割を遂行しないとき、(3) 長時間預けていたり日々の子育てを満足に出来ていないなど、子どもの世話をしたいけれども、満足に行なうことができなかつたときであった。

(6) 中国の母親がもつ子どもへの罪障感

1) 罪障感を感じるがあると答えた母親は 64.36%、感じることはないと答えた母親は 34.65%であった（無回答 0.99%）。日本で行なった同じ調査（石野，1998；未発表）での結果よりも「ない」と答えた者が非常に多いのが本調査の特徴的な結果であった。

2) 罪障感が喚起される場面で最も多かつたのは、①時間がない(27.12%)であった。そのほか表現は異なるが、③の忙しい(18.64%)も含めると半数弱の母親が子どもとよく接していないと考えているようである。次に多いのが、母親の負の心理状態であり、②機嫌が悪い(22.03%)、④イライラしている(15.25%)、⑤感情のコントロールができない(11.86%)と表現し回答されていた。日本で行なった調査では出てこなかつた回答として、「子どもの勉強の成績がよくなか

ったとき」(5.08%)があげられる。「子どもが悪いことをしたとき」(8.47%)という回答もあり、これは日本でもみられることであった(石野, 1998; 未発表)。しかし、就学前児の子どもをもつ母親の回答として勉学に関することが挙げられることは、教育熱心な昨今の中国国内の事情がうかがえる。

3) 罪障感の対処法として最も多かったのは①接する時間を作る(25.42%)であった。また、子どもと言葉を交わすという方法として、②謝る(23.73%)、③話し合う(23.73%)、④慰める(5.08%)と回答する母親も多かった。罪障感を喚起する場面として多く挙げられた、母親の負の心理状態への対処法として⑤冷静になるよう心がける(18.64%)という回答も多かった。⑥子どもの希望をかなえる(13.56%)と回答も多かったが、このほかに⑦おもちゃを買い与える(13.56%)、⑧好きな食べ物を与える(13.56%)、その他「衣服を買い与える」(1.69%)といった、何か物を与えるという対処法が多くみられたのは、本調査における対象者の特徴的なことである。

4) 罪障感が喚起されない理由は①最善の努力をしている(67.65%)という回答が最も多かった。そのほか、②親子関係は完璧・問題は生じていない(14.71%)とうまく行なっているという高い評価や、③子ども中心の生活をしている(11.76%)という養育態度を答える母親も多くみられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ①高 健・石野陽子 中日大学生婚観の跨文化比較研究 天津中医薬大学紀要 印刷中 査読有
- ②石野陽子 親が子どもに「ごめんね」と思うとき—母親が子どもに抱く罪障感の意味と役割— 発達 126 33-41 2011 査読無
- ③太田洋介・石野陽子 苗字に関する態度と自我同一性、家族アイデンティティ、および伝統的家族観との関連 島根大学教育学部紀要 44 89-103 2010 査読有
- ④石野陽子・清水寛之 青年期の結婚観と子育て観に関する予備的研究 島根大学教育学部紀要 43 87-95 2009 査読有
- ⑤石野陽子・戸田有一 父母の子育てのたのしさをはばむもの・ひろげるもの 発達 114 19-25 2008 査読無

[学会発表] (計 12 件)

- ①石野陽子・清水寛之 大学生の過去経験の記憶と時間的展望(1)—大学生は実現不可能体験を他者へ伝え実現を願うのか— 日本発達心理学会第22回大会 2011年3月27日 東京学芸大学小

金井キャンパス

- ②清水寛之・石野陽子 大学生の過去経験の記憶と時間的展望(2)—大学生が次世代へ伝えたいこととは何か— 日本発達心理学会第22回大会 2011年3月27日 東京学芸大学小金井キャンパス

③ISHINO Yoko A Comparative Study on the Sense of Marriage and Child-Rearing between Japanese and Chinese Adolescents The 2nd Regional Symposium of CIFA(Consortium of Institutes on Family) 2010年11月27日 東京大学本郷キャンパス安田講堂

- ④石野陽子・高 健 中国の青年の結婚観・子育て観に関する調査研究—祖父母世代との共同子育て— 日本心理学会第74回大会 2010年9月20日 大阪大学

⑤石野陽子・神田直子 障がいの認知から子育て充実感へ至る過程—母親罪障感の関連(「第4回愛知の子ども縦断調査」より)— 日本教育心理学会第52回総会 2010年8月27日 早稲田大学

- ⑥江上園子・朴 信永・石野陽子・遠藤利彦 母親の特性と子どもへのかかわり方との関連を考える 日本発達心理学会第21回大会 2010年3月28日 神戸国際会議場

⑦石野陽子・神田直子 母親罪障感と児童期の子どもをもつ母親が抱く不安の予備的研究—「第4回愛知の子ども縦断調査」より— 日本発達心理学会第21回大会 2010年3月27日 神戸国際会議場

⑧石野陽子・高 健 中国の大学生の結婚観に関する意識調査 日本心理学会第73回大会 2009年8月28日 立命館大学

⑨ISHINO Yoko, TODA Yuichi, KANDA Naoko & SUWA Kinu Stress and Maltreatment Tendency of Fathers and Mothers of Infants and Young Children XIV European Conference on Developmental Psychology 2009年8月20日 (Mykolas Romeris University, Vilnius, Lithuania)

⑩石野陽子・清水寛之 青年の結婚観・子育て観に関する調査研究 日本発達心理学会第19回大会 2009年3月25日 日本女子大学

⑪清水寛之・石野陽子 大学生における幼少期の被養育経験の記憶と子育て観 日本発達心理学会第19回大会 2009年3月25日 日本女子大学

⑫石野陽子 母親がもつ子どもへの罪障感(6)—就学前児をもつ中国の母親による自由記述— 日本心理学会第72回大会 2008年9月21日 北海道大学

[図書] (計 1 件)

- ①藤田哲也(編著)／石野陽子(分担執筆)・他5名 ミネルヴァ書房 絶対役に立つ教養の心理学 担当部分: 第7章 どのような道を歩んできたのか—発達心理学— 2009 218頁(担当頁159-188頁)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石野 陽子 (ISHINO YOKO)

島根大学・教育学部・講師

研究者番号：90457028